

月の花挽歌 ～10. 月山<sup>がつざん</sup>～

10-4

顔を見合わせた二人の男優は互いにきまり悪そうに首を振った。

「キャスティング・ディレクターとして、渡辺謙や真田広之や菊地凛子などをハリウッド映画に送り込んできた人なの。彼女の名言によれば、役と役者の魅力が噛み合うと、化学反応が起きるそうよ。とにかく一言では語れないチャーミングな女性です。近いうちに紹介します」とKは言って、この場の話題にまつわる勘所をいつの間にか、さらっていた。

「恥ずかしながら、業界にどっぷり浸かり過ぎて、肝心なことを見落としていました。なんたってハリウッド映画だよ！すぐにでもその方にお会いしたいなあ。君たちもそうだろう」とTらしい物言いで、同伴の男優と女優に同意を強要した。

「でも、私たちはオファーをもらったことがなかったことも、彼女の存在を知らない理由の一つになりませんか」と女優は言って、自嘲気味に笑った。

「それはそうだけれども、その時のシナリオや監督との会話を手がかりに、ピンときた人を選ぶわけだから、我々の顔が浮かんだとしても、語学力も含めて彼女のイメージにそぐわなければ仕方がないよね。一度お会いして印象づけておくことも必要じゃないかな」と男優は野心をのぞかせて前向きに言った。

横田はTが指摘したように自分が『カサブランカ』にまつわる話をなまじっかしたせいで、予想外の映画談議になったことに困憊していた。あまつさえ、自分らしくないよそ行きの言葉遣いも相まって、酔いが暴走し始めていた。

タクシーを呼んでもらった方が良くと壊れる寸前で自覚した横田は、声掛けしようとした真紀が身を振りながら人気男優の左手を着物の上前の膝に誘導するところを目の当たりにしてしまった。

いかに高級クラブであっても、お客のスケベな行為をホステスがさり気なく対応することは珍しくないはずなのだが、この時の横田には通用しなかった。

「おい、二枚目は何をしてもいいのか！」と横田は声高に叫びながら、テーブルの上に乗ると人気男優に飛び掛かって殴ろうとした。

同席者はもとより、近くの席の誰彼なしに何が起こったのか瞬時に判断できなかった。

割れたシャンパングラスが飛び散り、驚愕する者たちは、横田の振りかざした手首を凄みを利かせた形相で掴んでいる男優を垣間見ることになった。